

## 谷川俊太郎全詩集の研究(3)

大阪芸術大学 文芸学科 教授 山田 兼士

- (1) 対論Ⅲ この詩集を読み 2016-2020(細見和之との共著) 濤標、2021、10、10
- (2) ボードレールの詩とエロス 詩誌「PO」第179号、2020年冬(竹林館)
- (3) 詩とは何かと問われたら 季刊『びーぐる—詩の海へ』第50号(濤標刊、2021、1、20)
- (4) 谷川俊太郎全《詩集》を読む(連載第9回) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第51号(濤標刊、2021、4、20)
- (5) 谷川俊太郎全《詩集》を読む(連載第10回) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第52号(濤標刊、2021、7、20)
- (6) 小野十三郎『抒情詩集』について 『詩論』との共時性を中心に 『PO』182号、2021、秋号
- (7) 谷川俊太郎全《詩集》を読む(連載第11回) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第53号(濤標刊、2021、10、20)
- (8) 銀河鉄道広島行き(小津安二郎映画『彼岸花』について) 『ERA』第三次第17号、通巻37号、2021、10、31
- (9) コクトーから見たボードレール 季刊『びーぐる—詩の海へ』53号(濤標刊、2021、10、20)
- (10) 彼自身によるボードレール—デュポンからフェレへ 季刊『びーぐる—詩の海へ』53号(濤標刊、2021、10、20)
- (11) 天井桟敷の子供たち —ドゥビュロー、ボードレール、プレヴェール 季刊『びーぐる—詩の海へ』54号(濤標刊、2022、1、20)
- (12) 谷川俊太郎全《詩集》を読む(連載第12回) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第54号(濤標刊、2022、1、20)
- (13) 八重洋一郎の本気—詩集『血債の言葉は何度でも甦る』書評 『イリプスⅡnd』33号、2021、3、10
- (14) 対論・この詩集を読み(45回) 青木由弥子『しのばず』(細見和之との対談) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第51号(濤標、2021、4、20)
- (15) 木澤豊詩集『燃える街／羊のいる場所』(書評) 「樹林」2021年5月号
- (16) 田中庸介詩集『びんくの砂袋』(書評) 「図書新聞」3495号(2021年5月8日)
- (17) 北村太郎『悪の花』のしづかな発狂 季刊『びーぐる—詩の海へ』第52号(濤標、2021、7、20)
- (18) 対論・この詩集を読み(46回) 和田まさ子『よろこびの日』(細見和之との対談) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第53号(濤標、2021、10、20)
- (19) 対論・この詩集を読み(47回) 小松宏佳『ひらがな商店街』(細見和之との対談) 季刊『びーぐる—詩の海へ』第54号(濤標、2022、1、20)
- (20) 秋亜綺羅詩集『十二歳の少年は十七歳になった』(書評) 『現代詩手帖』2022年1月号
- (21) 感応する恐怖 —ボードレール私見『みらいらん』第9号、2022、1、15
- (22) ボードレール生誕200年「詩(から)の越境」(司会者を含む4名のパネリストの一人として)(2021年5月23日、日本フランス語フランス文学会、於・上智大学)

以上22点の中から、特に本研究と関連の深いものとして4、5、7、12が挙げられる。谷川俊太郎全《詩集》のうち第29詩集『日本語のカタログ』から第53詩集『子どもたちの肖像』まで、計25冊を取り上げた。時代でいうと1984年から2009年まで、四半世紀にわたる作品群である。この間に、谷川俊太郎の作品は、実験的現代詩、一般的抒情詩、児童詩、写真詩、詩画集と、多彩に展開しつつ、次第に深さと広さを深めていった。その中から、第52詩集『私』(2007年)について論じた一節をここに再録する。

「長きにわたって詩における「私」性を否定してきた詩人が「私」を主題にした一冊。人を驚かすのも詩人の使命とばかりに、大胆に描写される「私」はまさに詩人の肖像だ。この詩集は、青年詩人の磊落さに溢れた第一詩集と比較されるべきであり、詩への疑念が最も深まった時期に書かれた『世間知らズ』と対に読まれるべきでもある。『世間知らズ』で「詩は／滑稽だ」と断じ「詩人なんて呼ばれて」と嘆いてみせた詩人が、十五年にわたるゆるやかな回復期を経て(詩の肯定)へと回帰した。「詩しか書けなくてほんとによかった」とは、「私は書き継ぐしかない」のリフレインと並んで、詩集中最も力強い詩作宣言である。小説も詩も現実の難問を解く直接的有用性をもってはいないが、詩は「世界を怨んじやない」ので世界の恵みを受けることができる。詩が言葉を超えた何かであることを、身体的な実感を込めて詩人は再認する。詩に対するデタッチメントを繰り返し標榜してきた詩人がついに詩そのものに憑依した。「わたくしの生命は／一冊のノート」(『二十億光年の孤独』)と呟いた少年はついにここまで生長したのだ。